

病理組織検査報告書

病院ID: 1

CAPITAL

御中

2013/04/03

(受付日: 2013/04/01)

患者名: イシハラ チビ

様

検査番号:

21

動物種: 犬

品種: 雑種

コース: Sta

組織数: 3個

年齢: 12 歳 6 ヶ月

性別: 今回避妊

連絡事項

この報告書はサンプルです。

検査部位 肘部、左第3～第5乳腺、卵巣・子宮

検査結果

	検査部位	診断名	脈管内			悪性度
			マージン	浸潤	転移	
悪性腫瘍	肘部	血管周皮腫	(+)	(-)	腋窩(-)	中
未分類						
良性腫瘍	左第3、第4乳腺部腫瘍	良性乳腺混合腫瘍	(-)			
非腫瘍	卵巣	著変認めず	/			
	子宮	子宮内膜過形成、慢性化膿性子宮内膜炎	やや(+)			

免疫染色・特殊染色

診断備考

病理組織診断

CAPITAL

診断医 石原 勇介

組織所見

肘部腫瘍は非上皮性細胞の腫瘍性増殖からなります。腫瘍細胞の異型性は中程度であり、核分裂像が散見されます。核分裂指数は11/強拡大10視野です。腫瘍細胞は紡錘形を呈し、花むしろ状構造や渦巻き状構造を形成しながら増殖しています。腫瘍組織の壊死は認められません。腫瘍細胞は周囲組織に浸潤性に増殖しています。本標本上、切除辺縁部には腫瘍組織の露出が認められます。本標本上、脈管内浸潤や腋窩リンパ節転移は認められません。

左第3、第4乳腺部腫瘍はいずれも乳腺上皮細胞と筋上皮細胞の腫瘍性増殖からなります。いずれの細胞成分も異型性は比較的軽度であり、核分裂像は少数です。乳腺上皮成分は不規則な腺腔や管腔を形成しながら、筋上皮成分はコラーゲンや粘液を産生しながら増殖しています。本標本上、切除辺縁部に腫瘍細胞は確認されず、脈管内浸潤やソ径リンパ節転移も認められません。

本標本上、両側の卵巣に形態学的な著変は認められません。

子宮では子宮内膜が肥厚しており、子宮腺が拡張・増生しています。これらを構成する子宮内膜上皮や腺上皮に明かな異型性や腫瘍性変化は認められません。拡張した子宮腺腔や子宮内腔には好中球やマクロファージが多数浸潤しています。一部の腺腔は崩壊しており、間質へのこれらの炎症細胞の浸潤も認められます。またリンパ球や形質細胞の浸潤も認められます。本標本上、子宮断端部の内膜にも軽度ですが同様の病変が認められます。

コメント

肘部腫瘍は血管周皮腫の所見です。血管周皮腫は軟部組織肉腫の範疇の悪性腫瘍であり、血管周皮細胞由来、もしくはPNSTs(末梢神経鞘腫)の一種と考えられています。本症例は犬の皮膚軟部組織肉腫の組織学的グレード評価におけるグレードIIに分類される組織像です。本標本上、腫瘍組織は切除辺縁に露出しており、再発に対する注意が必要です。転移の有無を確認の上、もし可能であれば追加の外科的対処も考えられます。2011年の文献では、グレードIIの軟部組織肉腫の転移率は7~33%とされています。また1997年の研究では、核分裂指数が10-19の軟部組織肉腫の生存期間中央値は532日と報告されています。

左第3、第4乳腺部腫瘍はいずれも乳腺上皮細胞と筋上皮細胞に由来する混合腫瘍であり、良性に分類されます。これらに関しては切除後は問題ありません。

子宮では子宮内膜が過形成性に増生しています。このような病変はしばしば化膿性炎症を伴うことがあり、本症例でも慢性化膿性子宮内膜炎が生じています。炎症は子宮内に留まっており、一般的に切除後は問題ありません。

上記診断に関してご質問やご不明な点などございましたら、診断医までお気軽にご連絡下さい。

写真1: 肘部腫瘍の中拡大像(×100)
腫瘍では紡錘形細胞が花むしろ状構造などを形成しながら増殖している。

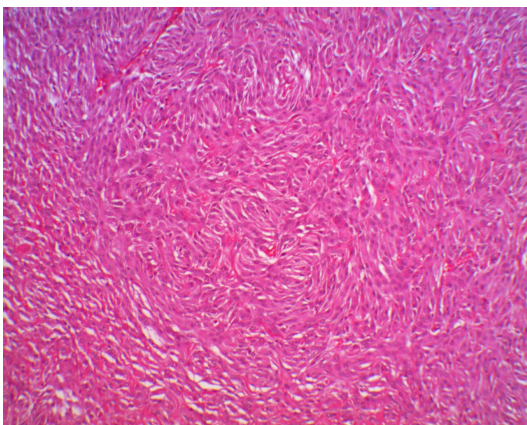
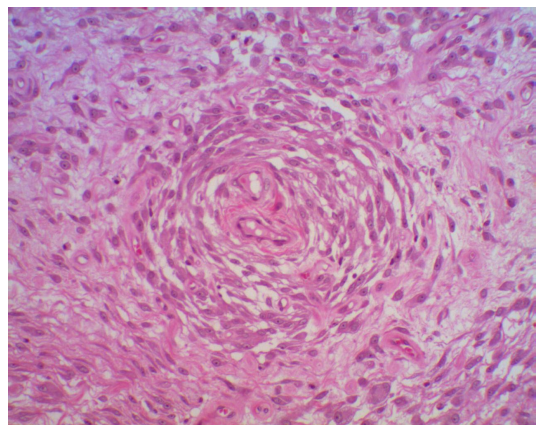


写真2: 肘部腫瘍の中拡大像(×200)
腫瘍細胞には血管を取り巻く渦巻き状構造の形成も認められ、血管周皮腫と判断される。



病理組織検査報告書

2013/04/03

イシハラ チビ

様

検査番号:

21

	検査部位	診断名	脈管内浸潤	転移	悪性度
悪性腫瘍	肘部	血管周皮腫	(-)	腋窩(-)	中
未分類					
良性腫瘍	左第3、第4乳腺部腫瘍	良性乳腺混合腫瘍			
非腫瘍	卵巣	著変認めず			
	子宮	子宮内膜過形成、慢性化膿性子宮内膜炎			

免疫染色・特殊染色

備考

病理組織診断

CAPITAL

診断医 石原 勇介

検査部位

診断名

肘部	血管周皮腫
左第3、第4乳腺部腫瘍	良性乳腺混合腫瘍
卵巣	著変認めず
子宮	子宮内膜過形成、慢性化膿性子宮内膜炎

組織所見

肘部腫瘍は非上皮性細胞の腫瘍性増殖からなります。腫瘍細胞の異型性は中程度であり、核分裂像が散見されます。核分裂指数は11/強拡大10視野です。腫瘍細胞は紡錘形を呈し、花むしろ状構造や渦巻き状構造を形成しながら増殖しています。腫瘍組織の壊死は認められません。腫瘍細胞は周囲組織に浸潤性に増殖しています。本標本上、脈管内浸潤や腋窩リンパ節転移は認められません。

左第3、第4乳腺部腫瘍はいずれも乳腺上皮細胞と筋上皮細胞の腫瘍性増殖からなります。いずれの細胞成分も異型性は比較的軽度であり、核分裂像は少数です。乳腺上皮成分は不規則な腺腔や管腔を形成しながら、筋上皮成分はコラーゲンや粘液を産生しながら増殖しています。本標本上、脈管内浸潤やソ径リンパ節転移は認められません。

本標本上、両側の卵巣に形態学的な著変は認められません。

子宮では子宮内膜が肥厚しており、子宮腺が拡張・増生しています。子宮腺上皮に自律性増殖の所見は認められません。また拡張した子宮腺腔や子宮内腔には好中球やマクロファージが多数浸潤しています。一部の腺腔は破綻しており、子宮内膜へのこれらの炎症細胞の浸潤も認められます。また、子宮内膜にはリンパ球や形質細胞の浸潤も認められます。

写真1: 肘部腫瘍の中拡大像(×100)
腫瘍では紡錘形細胞が花むしろ状構造などを形成しながら増殖している。

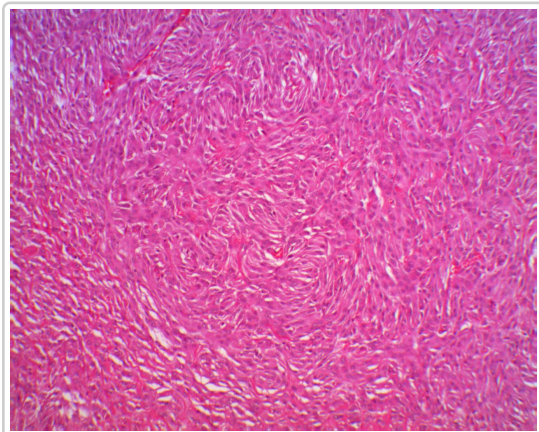


写真2: 肘部腫瘍の中拡大像(×200)
腫瘍細胞には血管を取り巻く渦巻き状構造の形成も認められ、血管周皮腫と判断される。

